

こうしたEM活動により、活動開始早々には、周辺住民の方から、川からの嫌な臭いはなくなったとの評価がありました。また小魚やハゼ、カニなどが増え、スズキやボラ、そしてサケの遡上や、多様な水鳥の飛来も見られるようになりました。生き物の底質調査の結果もイトミミズやゴカイなど豊かな生態系の回復が報告されています。

今では日本橋川だけでなく、神田川、隅田川も含めて、全体的にきれいになってきました。雨が降らなければ、水の透明度も高く、平均1.5m〜2mあります。東京都の下水設備の関係で、雨の直後は浄化槽からオーバーフローして、汚水が日本橋川に流入するため、一気に汚濁が広がりますが、以前と比較して回復にかかる時間も短くなり、3〜4日で回復するようになりました。

民間で日本橋川をきれいにしようという働きかけが功を奏して、東京都も下水の整備を進めてきていますが、下水の付け替え事業は約10年かかります。河川浄化は東京都だけに頼るのではなく、官民協働でやっていく必



毎年7月に開催される日本橋橋洗いは、上の写真のように、EMシャボン玉石けんが利用されています。下の写真は放水車で日本橋銘板の洗浄作業。



日本橋川に架かる日本橋

これは川を活かしていく発想の中から生まれた企画ですが、日本橋川がきれいでないといふ成り立たない事業でもあります。重油による汚染を解決するために、現在リチウムイオン電池で動く船を検討しており、これが実現すれば、川や海がもっと綺麗になります。



EMが施用されて、樹勢がいい日本橋北東橋詰の桜。場所は日本橋三越側で日本橋魚河岸記念碑があります。

日本橋川も周辺の水域も、この桜のように元気によみがえっていると

要があります。まずは自分たちから動かなければ何も始まりません。

「名橋『日本橋』保存会」では2ヶ月に1回、年6回、中央区・千代田区で船を出して、日本橋川の清掃も行っています。始めた頃は、山積みに

なるほどの大量のゴミがありました。が、今ではずいぶんときれいになりました。

毎年7月には今年で42回目となる日本橋橋洗イベントも地域の皆さんの協力のもと、盛大に開催しています。

川を活かしていく発想から、様々な企画が実現

EM効果を実感する日本橋の桜

EMの効果は、日本橋に植えてある桜の樹のうち、EMを施用した桜の樹勢の良さが証明しています。この桜は、他の桜と比較して、落葉が遅く、11月〜12月までもついています。また、以前は樹勢が弱くなると虫がついて大変でした。EM施用の桜も1年目は虫がつか



千代田区にあるEM活性液製造装置。2006年12月に設置以来、毎週10トンをためず培養して、すでに約3,000トンという膨大なEMの放流を続けています。

NPO法人地球環境・共生ネットワークが協力 よみがえりつつある日本橋川浄化プロジェクトは サケが遡上する清流を 目指して進行中

東京都中央区・千代田区

架橋100周年を迎えた日本橋とその下を流れる日本橋川の浄化活動に取り組む「名橋『日本橋』保存会」の永森昭紀 事務局長に3年ぶりにインタビューをさせていただき、今後の活動やビジョンについて語っていただきました。

3年後のサケの遡上を
願って、稚魚を放流

今年3月、日本橋の滝の広場にある船着き場から、3年後の遡上を祈って、サケの稚魚が放流されました。10cm位の稚魚で、約1000匹の放流です。

2011年3月に予定していた第1回目の放流は、まだ記憶に生々しい東日本大震災の影響で、中止となり、今年が第1回目となりました。日本橋川では以前にもサケの遡上が目撃されており、今回放流のサケもきつと再び戻ってきてくれると信じて楽しみにしています。



日本橋にある船着場からサケの稚魚を放流 (2012年3月)



日本橋川浄化へ
EM活動はたゆまなく継続

日本橋川は、江戸時代には、神田川と繋がっていませんでしたが、現在では水道橋付近で神田川から分流し、永代橋付近で隅田川に合流する約4kmの河川です。昭和20年代はきれいな川でしたが、昭和30年代の高度経済成長期を迎え、昭和38年には川のほぼ全面を覆うように、首都高速道路が開通して、汚れが目立つようになりました。

2006年12月より日本橋川のEM浄化が開始され、流入河川や流入域である東京湾も、年々水質が改善され、生き物の種類、数が増加しています。EMが生態系の底辺を支える有用微生物であることから、生物の多様化がEM浄化の特徴になっています。

亀島川のサケの遡上 2008～2011

亀島川にてサケの遡上が見られたのは、2008.11.13、2009.11.19、2010.11.19、2011.12.8の大潮、2011.12.19の長潮の日を確認されました。その他、古川、お台場、汐浜運河などでも確認できました。

今年は、新亀島橋から亀島橋に繫留され、最近運転されていないモーターボートの底部分にサケの群れが回遊しており、昨年の3倍の30匹ほどが集まっているのを見ることができました。

亀島川 2011.8.12

亀島川では、オナガガモ、カルガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、ユリカモメなどの渡り鳥も多く見られ、他に、ハクセキレイ、インビヨドリ、シロチドリなど多様な生き物に出会うことができるようになりました。川岸に60年以上住んでいる方は、2年前にモクスガニを見てびっくりし、最近、カニ、魚や鳥の種類が多くなったと話していました。



ボートの下を回遊するサケの群



亀島橋から新高橋の間で見られた15～20cmのボラの群



キンクロハジロとヒドリガモ（手前）

台場の生き物調査 2012.7～8

台場海浜公園では、小魚の群れが、エサを求めて浅瀬の砂浜に大量に押し寄せていました。浅瀬は、稚魚のユリカゴ・餌場になっています。周りで大きな、ボラが跳びはね、鵜やサギ、カモメが待っています。

この日は小潮だったため、手前の砂浜ではアサリを1個採取しただけでしたが、後日晴天に出かけていくと、初めて来たという親子連れがバケツに沢山のアサリを獲っていました。



2012.8 小魚を追って、水面を跳ぶ魚【写真：上】
台場海浜公園前の海面では、じっと観察していると、数分おきに、魚が水面を跳ぶ姿が見られます。



2012.8 親子連れのバケツの中には、いっぱいのアサリとカニが【写真：右上と下】

京浜運河・大井ふ頭中央海浜公園の生き物調査 2012.7.12

EM浄化の特徴として、汽水域・干潮域では最初にフナムシが見られます。貝類の他に、大型化したフナムシが護岸全体から歩道にまで見られました。フナムシなどの甲殻類が出てくるとカニも甲殻類の仲間も見られるようになります。



フナムシ

神田川と日本橋川の水質・底質・生物調査 2012.1.25

【天候】気温：1～6度 【中潮】満潮：6:35 干潮：12:16

10時より上流の神田川・飯田橋職安前→日本橋川・堀留橋→神田橋→日本橋→湊橋の順で採集調査をしました。

雪雨の後でしたが、水質・透明度の回復力は早くなっていました。飯田橋では、初めて大きなムラサキイガイとヒナリガイの殻（下左写真）が見つかりました。また、神田橋と日本橋でゴカイの生息（下右写真）が確認され、EM効果を生き物の多様化で実感できます。



飯田橋付近 ヒナリガイとイガイ



日本橋付近 ゴカイ

日本橋川に架かる橋から見られる生き物 2012.7



南堀留橋 カニの群れ



西河岸橋右岸 小魚の群れ



西河岸橋 魚を獲るコサギ

浜離宮の生き物調査 2012.6～7

今年は、クロベンケイガニが石積護岸の隙間に見られるようになりました。微生物が増えて、酵素や栄養塩類が多くなると、プランクトンの種類と数が多くなります。エサが豊富になるので魚貝類の種類と数も多くなり、さらにサイズも大型化していきます。そして、魚を狙う鳥達も増えてきます。



フナムシ、クロベンケイガニ



浜離宮でみられた小魚の群れ



コサギ



アオサギ

日本橋川から東京湾へ 豊かな生態系がよみがえる

東京都

NPO法人地球環境・共生ネットワークの研究員技術担当である星野豊さんが、日本橋川へのEM投入後の生物多様性の変化の、フィールドワーク調査を続けています。今回はEMの影響が、日本橋川とつながる周辺河川やお台場をめぐり、東京湾へと拡散している様子を、生き物調査を通じて、まとめて下さいました。



星野豊さん

《日本橋川EM浄化関連調査場所》

外濠、神田川、日本橋川、亀島川の他に、お台場、京浜運河、汐留川、浜離宮・旧浜離宮、大森ふるさとの浜公園（内川の水が流入）、古川、目黒川、香川、海老取川、多摩川、葛西臨海公園、左近川、旧江戸川、荒川、中川、小名木川、大横川、横十間川、野川、仙台東川など

日本橋川から亀島川、そして隅田川を經由して、 東京湾へと続く流れ



生き物の繋がりでみる
日本橋川へのEM投入の効果

生態系は、生き物のつながりで成り立っています。生き物が生きられることは、人類にとっても安全・安心であることを皆さんに理解してもらうことが大切です。生態系の変化を調べるには生物調査が重要になります。

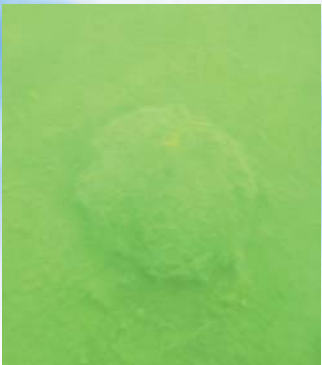
分析機器を使った数値だけでは、複雑な生き物のつながりを解析・解明することは不十分です。生物調査が重要になります。BODが5mg/l以下であれば生き物が生きられるとされていますが、この基準だけでは生き物が観測できない場合も多々あります。

関東平野には、2700万人が生活しており、家庭廃水や商工業用排水、農業排水が各河川を通して東京湾に注ぎ込んでいます。東京湾は干潟や自然護岸が激減した上に、

汚染が進み、漁獲生産量が減少するなど重大な環境問題になっています。

日本橋川・神田川および外濠へのEM投入による浄化は、EM資材を投入するだけで、切断された食物連鎖・物質循環を修復します。小さな生き物から大きな生き物が増えることで自浄作用が高まり生態系を豊かにします。

目視できない現場でも、EM資材を投入すると、ゾウリムシ、ワムシ、ミジンコやクロレラなどが発生し、魚貝類、昆虫、鳥類が飛来するようになります。小魚、貝、カニ、エビやカエルなどをエサとするサギなどが飛来することは、魚貝類が発生しているということです。サギ等の鳥類などが見られるようになるとEMの効果理解できない人でも、感性の良い人はEMの効果を納得します。



海底に沈んだEM団子。EM団子の周りがクレーター状にへこみ、ヘドロの分解を促していると考えられます。(平成23年5月12日撮影)



EM団子の溶け跡に寄ってきていたマガキガイ。周りにあった貝を集めてみたら、こんなにたくさん集まっています。(平成24年7月18日撮影)

調査観察結果では、ヘドロ削減ポイントで30 cm程のヘドロが無くなり、投入ポイントの海底だけ真っ白い菌糸が出た状態が観測されました。マガキガイやサザエがEMバクダンの近くに寄るといいう現象も起きています。EM投入によって藻が蘇生し始め、生物が寄りつくことは事実として確認できています。また、藻場再生ポイントの引本漁港前では、多くのナマコやサザエなどが増え始め、ダイバーショップMTKのプライベートルビーチではホンダワラ科イソモクの自然自生が確認されています。



ゆめ向井工房のみなさんと紀州EMひろば代表山路誠二さん。EM製造は山路さんがアドバイスをしています。



指導員の血屋敏朗さんとEM拡大培養機「百倍利器」。2台をフル稼働しています。手に持っているのが「ふる一つEM活性液」。

授産施設ゆめ向井工房(通所)はEMを供給するステーションとして、地域に貢献

熊野灘を望む自然豊かな立地にある、尾鷲市ゆめ向井工房(通所)。17名の施設利用者がEM活性液やEMプリン石けん(液体)、EM固形石けんの製造・販売を行っています。EM拡大培養機「百倍利器」を2台設置し、フル稼働してやつと地域住民のニーズに応えています。毎週水曜日にEM活性液の定期配達を行っていて、500 mlのペットボトルを合計で月に約3000本、婦人会をはじめ、地域の利用者に出荷しています。「生活全部に使っています!」「介護に使うと、ニオイが気にならなくて嬉しい!」と、喜びの声がたくさんあるそうです。

授産施設ゆめ向井工房(通所)はEMを供給するステーションとして、地域に貢献

環境を汚染する生活排水がEM活用で環境浄化源へ

10年ほど前、地元の高校生たちが尾鷲神社の前を流れる北川に米のとぎ汁EM発酵液を流していました。EM投入地点の上流に住む尾鷲市連合婦人会員の稲葉さんがその様子を見て、高校生の指導にあたっていた山路さん(質問)「EMで川をキレイにしているんだけど、上流から汚水が流れてくる」と言われた稲葉さんは、すぐさま婦人会長の塩津さん(報告し、EMの勉強会を山路さん(お願いすること)にしました。米のとぎ汁が汚染源になると知った婦人会の会員たちは、米のとぎ汁を利用してEMを培養し始め、排水口や花、農業など生活のあらゆるシーンに利用し始めました。会員の一人、濱口さんは植林活動にも参加していて、植林の時に撒く水の中にEMを入れていきます。「葉色が濃くなり、木にツヤもでますよ」と話してくださいました。EM利用率は婦人会の会員800世帯中、80%ほどというから驚きです。

ヘドロや悪臭がひどかった北川は、今では砂地が見え、魚が泳ぐ美しい川に蘇っています。河川周辺の家庭が環境浄化に興味を持ち、EMを理解し、生活のあらゆるシーンにEMを活用して



左から尾鷲市連合婦人会長の塩津文子さん、婦人会員の濱口久子さん、稲葉政子さん、山路さん。山路さんを代表に紀州EMひろばとして活動しています。EMできれいになった北川にて。



ヘドロや悪臭がなくなり、砂地と魚たちが蘇った北川。

いくことで、継続的かつ効果的な浄化活動につながっています。北川を下るとその先は熊野灘。北川は住民の日常生活と熊野灘再生をつないでいます。



熊野灘再生につながる 市民・町民の力

三重県紀北町・尾鷲市

三重県紀北町と尾鷲市は海・山・川の豊かな自然と、世界遺産「熊野古道」が通る歴史ある町。紀北町EM有志の会(代表 山路誠二さん)は、熊野灘海域に流入する河川周辺の家庭へのEM普及によって、地域の再生と熊野灘の浄化活動に取り組んでいます。



水中調査に協力してくれているダイバーショップMTKの前で。左から2番目がダイバーの藤倉さん。



EMバクダンと名付けたオリジナル巨大EM団子。右から紀北町EM有志の会代表の山路誠二さん、ボランティア参加の津村衛三重県議会議員、NPOイーエム市民広場代表の小川敦司さん。

熊野灘海域へ続く白石湖、引本湾、神宮島で、EMバクダン“投入”環境浄化と藻場再生プロジェクト

平成22年第一回全国一斉EM団子・EM活性液投入イベントの際に、「せつかく海をキレイにする活動なので、EM団子を投入した後に魚が泳ぐ様子を子ども達に見せてあげたい!」と、ダイバーショップMTKが協力して水中観察を実施。

平成22年から、「EMバクダン」と名付けた巨大なEM団子とEM活性液を定期的に海に投入しています。EMバクダンは1個が、通常のEM団子(テニスボール大)の約90個分。重さがあるので、確実に海の底に沈むため、ヘドロの分解や水質浄化を促します。毎月1回、3ヶ所の投入場所にEMバクダンをそれぞれ約13個ずつ投入し、ヘドロ削減と藻場再生を図っています。ヘドロを浚(さら)するのなら、何十億という費用がかかりますが、EMによる浄化ならば、かかる費用の何十分の一で済み、さらに豊かな生態系を蘇らせてくれます。



鮎の食べる藻がついた石と石に群れる鮎



EM工房もみじ内には2次培養タンクと奥には百倍利器があります。



EM活性液が並んだ棚

10年以上にわたるEMの一般家庭への普及により、河川の水質を良い状態で維持している足助川

合併後の平成18年～19年には地域全体でEMを活用。当初は無償提供し、すでにEMが地域に定着していたため、途中から有償に切り替えました。多くの方は使用を継続していて、少なくとも、足助自治区600世帯の約20%が利用していると思われます。今でも、足助自治区7町でEM活性液を週700ℓ販売、年間で約30～40トン近くが各家庭で利用されています。その他、各自治区での集会所のトイレや市営住宅の浄化槽などに利用されており、また農業用としては、1次活性液を販売して、農家が2次培養して使用しています。

農業用ダムとしての三河湖や作手川を源流とする巴川本流も鮎では人気スポットですが、EMを活用する足助自治区を抜けてくる巴川支流の足助川の方が、プロの釣人の間で、評価が高く、天然鮎の生育も良いなど、河川の水質が良いと考えられます。川底の砂に魚影を写す美しい足助川は、天然鮎の漁場としても、ホタルの観賞スポットとしても自然の豊かさを感じることができます。

鮎の溪流釣りの醍醐味は清流だからこそその友釣りにあり

巴川漁業協同組合の理事で、鮎釣り歴30年以上の真野さんに足助川の鮎について伺いました。

鮎は水温10℃以上で遡上が始まり、17～18℃で活動が活性化。鮎のエサである藻もその温度で発生するので、鮎の縄張り意識も強まり、友釣りの適温とも言えます。鮎は川藻を食べて生育するので、汚染度の高い川では生育できませんが、足助川は水がよいので、多くの釣人が訪れ、友釣りを楽しんでいます。やや赤茶けた藻が付着した石の表面に鮎が藻を舐めたあとがあるかどうかを見分けるのがプロの条件で、石に舐めたあとがある場合は、縄張りがついている証拠なので、友釣りに適したスポットと言えます。

巴川流域では、鮎の放流事業として、琵琶湖産と海産の鮎の稚魚を放流しています。また矢作川での天然遡上した鮎の汲み上げも行い、放流しています。

鮎のシーズンは6月～9月。

2007年がピークで、2011年は台風後の出水の影響で、水温が上がらず、遡上する鮎が少なかったのですが、今年は好調だそうです。



鮎について、解説してくれる足助商工会副会長・巴川漁業協同組合の真野正夫さん



美しい流れの足助川に群れる鮎を観る比嘉教授（2012年7月17日撮影）

EMによる三河湾浄化の源流は
鮎が遡上する
美しい足助川
愛知県足助町



もみじ工房の看板を感慨深げに眺める比嘉教授

三河湾に注ぐ矢作水系の上流に位置する足助町は、紅葉が美しい香嵐溪が有名です。香嵐溪は町内を流れる巴川本流沿いにあり、その支流の足助川沿いには古くからの商店街が展開しています。豊田市との合併以前、足助町では、下水道の完備を検討しましたが、約60億円の事業費に断念しました（豊田市になって、下水道事業は復活し、現在整備が行われています）。当時、香嵐溪の紅葉が映える巴川や、鮎釣りの入川料の確保のためにも、足助川をはじめとする巴川流域沿いに広がる市街地からの家庭雑排水による水質悪化を防ぐことが急務の課題でした。平成15年頃、足助町では、EMの効果を検証するため、住民に協力をお願いしてEMを使ってもらい、その後、独自に水質検査を行いました。水質検査の適切な場所として選ばれたのが、足助商工会の柴田さんの集落を流れる川でした。検査の結果、大腸菌が大幅に減ったことで、本格導入を決定。EM培養装置を行政で購入しました。



足助商工会の柴田栄さん（右）と培養を担当する水野保男さん（左）

しかし、足助町は豊田市との合併の話が決まり、EM事業は足助商工会が継続することになりましたが、EMの培養をしていた施設（もみじ工房）が使えないことになりました。そんな折、平成17年の合併を控えた、平成16年12月末、急遽、行政に予算化の話が浮上しました。年内に新しい培養場所の確保ができれば、予算化ができるということで、柴田さんは、急遽、場所の確保に奔走しました。その努力の甲斐があり、現在の寺院の敷地内を借りることが決定、予算300万円も確保しました。そして平成17年に「もみじ工房」を移設。予算によって、培養機（百倍利器）の購入と40℃の給湯器を設備し、培養を開始しました。

現在のもみじ工房の看板は、移設前にスポーツセンター横の培養施設に掲げてあったものだそうです。合併前には比嘉教授も勉強会などで、足助町を訪問しており、今回の訪問で、もみじ工房の看板をみて、感慨深げでした。



「大原EM Loveネット」の皆さんと、吉彌信子さん(右)。吉彌さん(京都市北区在住)のボランティアによって大原バス停の公衆トイレの悪臭が消えたことが、大原の皆さんとEMの出会いのきっかけとなった。

「呂川を美しくする会」がEMに取り組み始めた頃とほぼ同じくして、大原地区の住民の方でもEMに取り組み始めました。

大原地区がEMに取り組むことになったのは、大原にお住まいの和田夏子さんが、EMボカシネットワークの会員の障害者施設「ゆいまる」に立ち寄った時に、始めてEMを知り、大原



「大原EM Loveネット」の代表、早川昭子さん

「環境浄化は家庭から」を
実践する女性たちの力が
大原の自然を守る

※京都市北区在住、NPO 地球環境共生ネットワーク 運営委員会
近畿東部地区世話人、EMボカシネットワーク京都支部、京都EM
Love世話人(月1回の勉強会を行い、今年で18年目に突入)

臭が軽減する効果が現れたため、その後も継続してEM活性液を投入し、今年で9年目になります。川が環境が改善し、悪臭が消え本来の美しさを取り戻しています。



ペットボトルに詰め替えたEM活性液を各町毎に持ち帰り、各世帯へ配布する。

での第1回目のEMの勉強会を吉彌さんに依頼して開催したことがきっかけでした。この勉強会に、大原の「里づくり協会」の世話人の宮崎良三さんがたまたま参加されていて、こんなに良いことはもつと掘げようと、大原の8つの町内で、吉彌さんを講師として、約1年をかけて勉強会を開催しました。

大原地区では「環境浄化は家庭から」ということで、高野川をきれいにするために大原地区八町の女性たちでつくる「大原EM Loveネット」という会が立ち上がりました。

毎月一回、「呂川を美しくする

会」が作成するEM活性液の一部を(二次培養の1トンタンクから)分けてもらい、「大原EM Loveネット」メンバーの各町の世話人が集まって、ペットボトルに移し替え、持ち帰って、各町内に配布します。現在は、大原地区の約70%の世帯にEM活性液を配布(1リットル50円で販売)しています。大原の各世帯にEM活性液が定着した理由としては、女性たちが家庭のトイレの臭いが消えたり、お掃除に効果を実感したりしたこと。家庭菜園や畑でのEM活性液の活用や、生ごみ処理などを行っているメンバーもいます。「大原EM Loveネット」が立ち上がったおかげで、それまで隣の人の顔も名前も知らなかった、大原に住む女性たちの交流が始まりました。EMによって、川の清流だけでなく、女性たちの生き生きとした笑顔が生まれています。

高野川の悪臭も抑えられていて、支流の草生川にはホタルが戻ってききました。2年後には下水道が整備され、高野川への汚染は緩和される見込みですが、その先も川への関心を忘れず、大原の美しい自然を取り戻し、守り続けてほしいと思います。

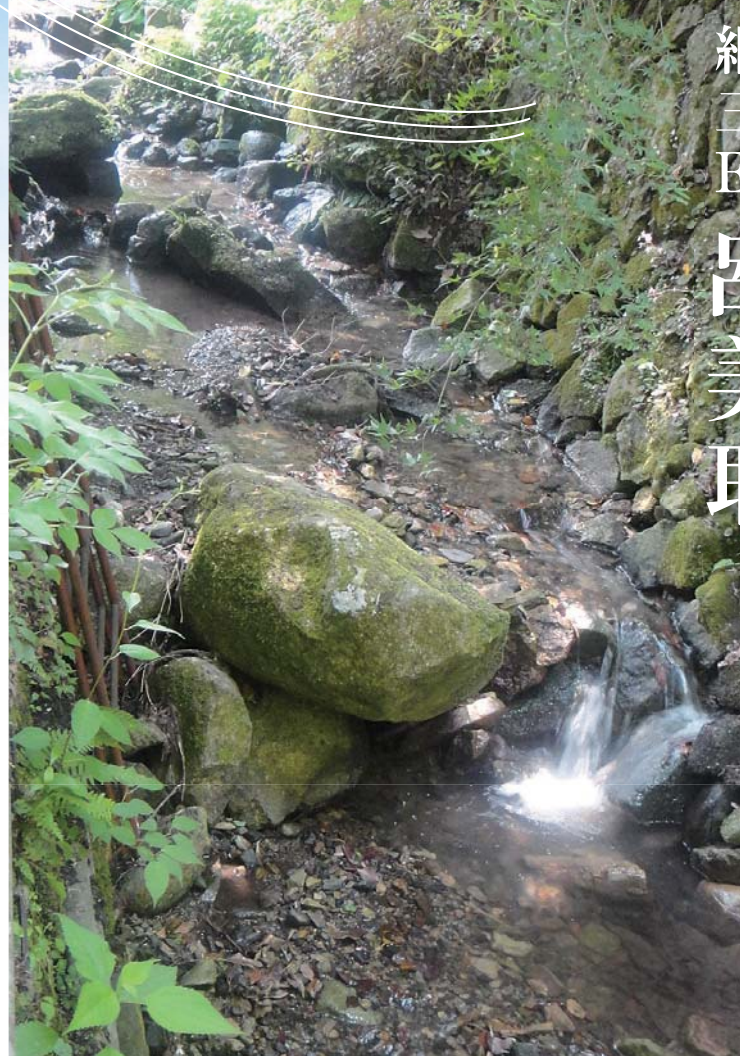
継続は力なり。
三千院で有名な大原の里は、
EMに取り組んで9年目

呂川そして高野川に
美しい調べと景観を
取り戻しています

京都府京都市

呂川・律川を観光地に
ふさわしい清流へと

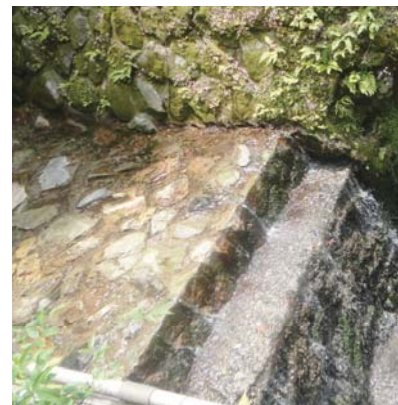
京都市の中心部を南へと流れる鴨川の支流、高野川に沿うように北東へと車で30分ほど走ると、三千院で有名な大原地区に着きます。三千院へ向かう参道に沿って、右手に高野川の支流の呂川が流れ、左手に土産物屋や料理屋が立ち並んでいます。かつて、一般家庭や商業施設から出る汚水の流入によって水質が悪化していた呂川は、水の流れが見えないほど川底に水藻が厚く生え、悪臭を放つようになり、観光客からは「この変な臭いは何ですか?」と言われる状況が続いていました。



呂川の美しい流れ(2012年6月)

昭和54年(1979年)に、呂川沿いの商業施設と三千院を会員として「呂川を美しくする会」を発足し、会費を集めて、呂川の川底の清掃を週に2回、観光客のピーク時ともなると2日に1回の頻度で行っていましたが、悪臭問題は一向に解決しませんでした。

そんな折、呂川沿いに店舗を構える漬物屋「志ば久」三代目の久保勝さんが、臭いが酷いと悪評が高かった、大原バス停の公衆トイレの強い悪臭が消えていることに気がつきました。観光地の玄関であるバス停のトイレの悪臭を、EMでなんとかしたいと思っていた吉彌信子さんが、誰にも言わず、ボランティアで掃除を続けていました。そこで久保さんは呂川の悪臭を消せないものかと吉彌さんに相談を持ちかけました。



呂川(上流の方)の様子。以前はヘドロのようになっていたコケが取れて、川底の石の色がきれいに見えるようになりました。今は悪臭はしません。



漬物屋「志ば久」三代目の久保勝さん。「呂川を美しくする会」でEM活用の取り組みを支えています。



呂川沿いの看板。猫のおかげで、観光客の写真スポットになっています。



京都バスの大原バス停:現在は公衆トイレが新築され、吉彌さんがEMで掃除をして、臭気が改善された古い公衆トイレはもうありません。